

＜第150回 国際ARCセミナー(Chelsea Foxwell氏)レビュー＞

古典籍データベースが可能にする研究

——江戸時代後半の画譜と博物図譜の重なり合いに関して

宮崎 優希(立命館大学文学部)

E-mail lt1480se@ed.ritsumei.ac.jp

1. はじめに

本稿は、2025年6月18日に開催された「第150回国際ARCセミナー」におけるチェルシー・フォックスウェル氏¹⁾の講演²⁾内容を報告するものである。

本発表では、主に江戸時代後半から明治期にかけて木版印刷による絵本・画譜・絵入り本などが視覚情報を一般社会へ普及させる上で果たした決定的な役割と、西洋の日本美術収集家たちの和本の鑑賞の方法について紹介し、それらを踏まえた上で、伝小田野直武作『新蕨飛虻図』を事例とした古典籍データベースによる分野横断的な図像解釈の手法や、そこから考えられるデジタル化された版本の新たな利用可能性、デジタル化された書籍を展示・普及させる際の課題点と今後の展望について論じられた。以下、これらについて詳細に報告するとともに、筆者の所感を述べる。

2. 発表内容

2-1. 絵本の歴史と需要：秘蔵から公開へ

江戸時代の視覚情報へのアクセス拡大を論じるにあたり、フォックスウェル氏は菱川師宣の出版活動に着目した。阿美古理恵氏³⁾の研究⁴⁾が示すように、師宣にとって権威ある狩野派や土佐派の新作の図像を入手することは困難なことであった。だからこそ師宣は、『大和侍農絵尽』の序文で出版目的を「稽古せん人の絵のなぐさみ」と記している。また、『大和武者絵』の序文にある「和国絵の風俗三家」について、鈴木淳氏⁵⁾はこれが土佐・狩野・長谷川家を指すとし、師宣が自らの画技でこれらを統合し浮世絵師としての地位を確立したと指摘している⁶⁾。フォックスウェル氏はこの論を踏まえ、師宣自身が巨匠たちの作品へのアクセスの難しさを身をもって知っているからこそ、その絵柄を広く社会に伝達・解放することを目指したのだと論じた。

氏は続けて、18世紀に入ると、『歴代名公画譜』や日本初の本格的な多色刷り画譜である『明朝紫硯』など、中国から伝来した木版画譜の受容が進んだと述べた。画像とテキストを柔軟にレイアウトできる東アジアの木版技術は、画譜の表現力を高めた。国内でも大岡春卜の『画本手鑑』や、狩野探幽の縮図を忠実に再現し

た1803年刊行の『聚珍画帖』などが出版された。特に後者は、科学者である森島中良の後援のもと、一点物の美術資料が孕む喪失リスクに対し、複製技術を用いて情報をアーカイブし後世へ継承しようとする極めて先駆的な取り組みであったと指摘する。

これら絵入り本や画譜は、特権的であった絵画系譜への一般庶民のアクセスを飛躍的に拡大した。氏は、これが現代のインターネット普及と同様に、江戸時代の視覚情報の入手方法に革命をもたらしたと強調する。しかし、明治以降は次第に入手が困難となり、戦後は貴重書庫に保管され資料へのアクセスも難しくなった。さらに、世界的な美術館の標準化に伴い、本来版本の一部であった一枚絵は額装されて独立した美術作品となり、版本自体は展示空間から排除されていったと指摘する。言葉の壁から、浮世絵を収集した西洋人が版本を軽視したと考えられがちだが、実際には次節で述べるように、ジャポニスム初期の収集家たちは日本の書物に対して洗練された鑑賞力を持っていたと論じられた。

2-2. 初期の西洋における日本美術収集家と書籍の鑑賞

画譜や絵本などの版本は、19世紀の西洋世界でも高く評価された。1863年、イギリスの批評家ウィリアム・マイケル・ロセッティは雑誌『ザ・リーダー』で葛飾北斎の『絵本魁』を取り上げ、言葉の壁がありながらも、その視覚的な美しさをミケランジェロやティントレットに匹敵すると絶賛した。

1880年代のパリでは、エドモン・ド・ゴンクールが『歌麿』を執筆する際、歌川豊国の『絵本時世粧』などの色刷り版本を比較対象とし、書物の中の細かな織物の質感や色彩に深く没入した。また、ウィリアム・アンダーソンの和漢書コレクションが示すように、近代の日本美術史研究の草創期は版本の豊かな情報量に深く依拠して形成されていた。なお、こうした背景には、シカゴ美術館編纂の蔵書目録が示す通り、昭和初期にはすでに日本国内の作品が海外へ大量に流出していたという経緯が存在する。また、仲田勝之助が『絵本の研究』を執筆する際に海外のコレクション情報に依存せざる

を得なかったエピソードは、文化財のグローバルな移動とアーカイブの重要性を物語っている。

2-3. 18 世紀における博物学的観察の浸透と『新蕨飛虻図』

20 世紀半ば以降、近代的な美術館の展示形式が普及するにつれ、版本は裁断されて壁に掛けられるか、貴重書庫に保管され、研究の主流から排除された。しかし近年、古典籍のデジタル化によって復活を遂げている。氏はその活用事例として、無銘の肉筆画『新蕨飛虻図』(伝小田野直武作)の解釈を提示した。

本作は掛け軸の垂直性を強調する樹幹の配置や、佐竹曙山の『画図理解』に基づく水面の光学的反射描写など、安永・天明期の「秋田蘭画」の様式を持つ。古典籍データベースを用いた検索により、画面下部の奇妙な植物が博物図譜に記された出羽(秋田)の産である希少なゼンマイであり、秋田特産としての自負を示すものであることが推測された。また、中国では否定的な意味を持つ虻も、大英博物館蔵の北斎『万物絵本大全図』や、小林一茶の俳句が示す俳諧ネットワークの調査から、日本では「春の吉兆」や「生命力の象徴」として肯定的に捉えられていたことが確認された。画像とテキストを往復することにより、本作が西洋由来の透視図法と博物学的観察眼を用い、地域の特産と春の吉兆を一枚の画面に再構成した、様々な知識が集合した芸術であることが解明されたのである。

2-4. 海外でのデジタル化された書籍を鑑賞する上で残された課題

古典籍データベースの普及により、専門外の研究者でも分野横断的な様々な研究が可能となった。しかしながら、展示空間や教育現場には課題が残る。美術館の環境では、ガラスケースの中で見開き 1 ページ分しか展示できないといった従来の展示手法が多く、来館者が本に没入する体験が損なわれてしまう。

また、現在のオンラインデータベースは単なる画像ビューアにとどまることが多い。シカゴ大学の授業での活用例が示されたように、ユーザーが画面上のテキストにマウスオーバーするだけで、現代語訳や英訳、くずし字の翻刻データが表示されたり、描かれた昆虫や植物のメタデータが即座に参照できたりするようなインタラクティブな機能が実装されれば、非専門家の学生にとっても教育効果は飛躍的に高まるだろうと氏は次世代のデータベースへの期待を寄せた。

3. おわりに

本講演では、江戸時代後半から明治期にかけて、絵入り版本がいかに視覚情報を広く社会に行き渡らせる役割を担っていたか、そして古典籍データベースがもたらす新たな研究の可能性について多角的に考察された。

質疑応答では、明治以降の近代化に伴う版本の受

容の変化や、海外への流出の歴史的経緯、近代の印刷技術との比較といった多岐にわたる視点から議論が展開された。

例えば、日本で版本へのアクセスが困難になった時期に関する議論において、昭和初期にはすでに国内の優品が海外へ大量に流出し、在庫が枯渇し始めていた歴史的経緯が示唆された。また、近代の活字技術の普及がビジュアルとテキストの分離を引き起こしたのに対し、江戸の木版技術は絵と文字を融合させ、空間的な移動を伴う美術館での体験とは異なる、時間的でプライベートな美術体験をもたらしていたという指摘もなされた。さらに、海外の主要な美術館・博物館における和漢書の収蔵の変遷や、デジタル化プロジェクトの実務的な事例も共有された。

これらの議論を通じ、絵入り版本が単なる美術作品の複製にとどまらず、当時の社会における情報伝達の重要なメディアであったことが改めて確認された。筆者も、デジタル化された資料が分野横断的な研究の重要な基盤となるという氏の指摘に深く共感する。さらに筆者自身、日頃から ARC でアーカイブ事業に携わっているからこそ、保存の先にある次世代のデータベースを描く氏の視点は大変示唆に富むものであった。現在進められている古典籍のデジタル化事業が、単なる資料の保存にとどまらず、テキストと画像を結びつけ、利用者の操作に応じて情報を引き出せるような機能を持たせた次世代型のデータベースへと進化することが期待される。そうすることで、専門家のみならず広く教育現場や一般の人々が利用する場面においても、江戸文化の魅力をより直接的に伝えることができるのではないかと考える。本講演はこれまでのメディアの変遷を見つめ直し、これからのデジタルアーカイブが果たすべき役割と新たな研究の展望を示すものであり、私たちが現在進めているデジタル化という営みが、未来の教育や分野横断的な研究にどう接続していくのかを改めて見つめ直す重要な契機となった。

[注]

- 1) シカゴ大学人文学部美術史学科教授
- 2) 立命館大学アート・リサーチセンター「第 150 回 国際 ARC セミナー (Web 配信)」
<https://www.arc.ritsumei.ac.jp/j/news/pc/024911.html>(最終閲覧日:2026年2月14日)
- 3) 現在、徳川記念財団所属。美術史学博士。
- 4) 阿美古理恵(2020)『菱川師宣:古風と当風を描く絵師』藝華書院
- 5) 国文学研究資料館名誉教授
- 6) 鈴木淳(2015)「菱川師宣絵づくし考」『国文学研究資料館紀要.文学研究篇』、第 41 号、pp.1-30(本引用は p.9)